

# 《座談会》 専修大学創立一三〇年記念事業を振り返って

## ― 専修大学史研究の回顧と展望 ―

座談会の趣旨について

平成二一年、専修大学は創立一三〇年という記念すべき年を迎えた。

それにもない大学では様々な記念事業を行ったが、それらは経済学や法律学など社会科学系の大学のなかでは、慶応義塾大学につぐ歴史と伝統を持つ本学にとって大学の歴史を学内外の人々にアピールする重要な意味を持っている。そのため、大学史にかかわる記念事業もいくつか行った。

本座談会では、この創立一三〇年記念事業のなかでも大学史にかかわる事業に深く携わっていただいた「専修大学一三〇年史編纂アドバイザー部会」（現在は「専修大学史編纂事業アドバイザー部会」と改称）の委員の先生方、そして大学史資料課をメンバーに加えて、この記念事業を振り返り、この経験を今後どのように活かしていくべきかを語り合っていた。

どの大学でも周年記念事業に際しては、大なり小なり自らの歴史を振り返る事業を行う。その意味でも、本学創立一三〇年記念事業は初めての試みも多く、携わった方々の生の声を記録に残すことは

今後の記念事業を考えるうえで大きな意味があるだろう。

なお当日、配布した資料に、専修大学史にかかわる一三〇年記念事業および今後の事業予定を記しているので参考資料として座談会記録の末尾に入れておく。座談会の日時、場所、そしてメンバーは左の通りである。

日時 平成二二年九月一日（火）午後六時～七時三〇分

場所 生田校舎九号館二階九二F会議室

出席者 永江雅和（経済学部教授）

高木 侃（法学部教授）

菅原 光（法学部准教授）

川村晃正（商学部教授）

新井勝紘（文学部教授）

大谷 正（文学部教授）

以上、専修大学史編纂事業アドバイザー部会 委員

瀬戸口龍一（大学史資料課員）

司会 青木美智男（専修大学史編集主幹）

『専修大学の歴史』の執筆にあたって

青木 本日はご多忙な中、大学の一三〇年記念事業を総括する会にお集まりいただきありがとうございます。

専修大学史編集主幹の青木が司会を務めさせていただきます。

ちょうど明後日の九月一六日が創立二二二年目です。『専修大学の歴史』はその創立記念日に合わせて刊行しましたので、一年前は本ができたばかりの頃です。あれから一年が経ちました。

本日お集まりの先生方には、一三〇年史の編集をご助言いただくアドバイザー部会のメンバーとしてご協力いただきました。その節は色々慌ただしいなかでお書きいただき、誠にありがとうございます。『専修大学の歴史』は、昨年度の神田校舎での後期授業から使わせていただいております。

そのほかにも、様々な事業を行ってまいりました。とりわけ大変だったのは昨年一二月、三重県の桑名市博物館と一橋大学との共催で第一回目の創立者展を開催したことです。こんな本格的な特別展を、特に他機関と共催するのは大学としても初めての試みでした。本日はその辺のことについてもお話いただきしたいと思います。

また、一三〇年の事業は終了しましたので、この四月からアドバイザー部会の名称が変更になりました。今後は、専修大学の歴史全体に関する編纂事業のアドバイザーということで「専修大学史編纂事業アドバイザー部会」とさせていただきます。

大学史の仕事のなかで一番重要なことは、大学が所蔵している資

料をどうやって整理・保存し、公開していく体制にまでもっていくのかということ。もう一つは、まだまだ他大学に比べて所蔵資料が少ない状況ですので、どうすれば新資料の収集が可能になるのか。そうした資料の収集方法についてもご意見をいただきたいと思っています。

そして最後に、おそらくこの次に本格的な大学史の編纂をやるとすれば創立一五〇年の年だと思っています。このアドバイザー部会で何度か議論していただいたなかに、一五〇年までの二〇年間に一〇冊ほどの資料集を作って一五〇年の編纂に役立てていくという話がありました。専修大学の歴史というものは日本の近現代の政治史や経済史に深くかかわっています。そこで大学史の資料集を刊行することによって、関連資料を公開して近現代史の研究をさらに進めていけるようなものになりたいと思っています。そのことについてもご意見をうかがえればと思います。

それでは最初のところからいきなりたいと思います。大谷先生にはこの『専修大学の歴史』を編集していくなかで一番ご苦労をおかけしました。さらに大学史の授業についても責任を持っていただきました。そこで大谷先生からその辺のところをお話いただきたく思います。

大谷 大学史の授業は一昨年の後期から始めました。こういった経緯で始めることになったのかよく覚えておりませんが、青木先生た

ちと相談しながら始めました。初年度は手探りで、最初に始めた明治大学や立教大学の教科書『立教大学の歴史』を参考にしました。教養科目にしたものですからいろんな制度上の問題で、半期二展開で四単位というかなりハードな授業を始めました。あれでよく学生が聞いてくれたなと学生に感謝してます（笑）。

始めるにあたっては今の流行の私学のアイデンティティという問題や、大学史を各大学でやっているということも後押しがあったと思います。昨年度から二単位になって、今年はさらに整備されたかたちでやりましたが、色々な試行錯誤や苦労はあったけれども全体としてやって良かったなというのが私の印象です。

当初は受講者の数もあまり多くなかったですが、今年度は比較的多数の受講者があったようです。私も前期に一回だけ授業をしましたが、大変熱心に学生が聞いてくれました。これからも少しずつ工夫をしながら、もう少したくさんの方が受講してくれるようになれば良いと思います。

それから『専修大学の歴史』の使い方として学生、特に新入生に力を入れるのももちろんですが、卒業生などかあるいは地域に発信していく方法がないのかなと感じております。

青木 ありがとうございます。高木先生いかがですが、実際に執筆して、授業もしていただいておりますが。

高木 執筆して、そのあとに育友会の父母の会合なんかに行って私が一番強調して話すのは、校歌二番の「世に魁けし 我等が大学」の意味は、実は法律学、経済学や財政学について系統的に授業を始めたのは専修大学が初めてのことだ、ということ。それから日本語で法学教育を始めたという意味は、創立者たちが留学中のアメリカで法学教育を始めたという意味は、創立者たちが留学中のアメリカで法律のなんたるかを、完全に自家菜籠中のものにくみ取って消化したうえでなければできないということです。

アメリカにいる間から近代国家の建設のためには法整備が欠かせないと、留学中から翻訳を始めている。彼らはみな士族の子弟で、翻訳にあたっては漢学の素養が非常に役に立ったし、語学の勉強のときにも日本語と構造の異なる中国語が役に立っています。

日本で初めて日本語で法学教育を始めたということには、かなり深い意味があるんだという話をしますと、皆さんとても関心を持ってくれます。単に「世に魁けし 我等が大学」とありますが、その「魁けし」の意味を『専修大学の歴史』を読んで注釈を加えながら話をする、とても納得してもらえます。

あと授業のことをいえば、私の受け持っている日本近代法史の授業では、半期の半分を創立者たちのことにあてています。それで教材を持っていない者が多いものですから、『専修大学の歴史』のなかから必要なところをコピーして渡しているんですが、これが意外な効果で試験のときには、かなりの生徒が『専修大学の歴史』を持つ

ています。だから授業で使うと、『専修大学の歴史』を読んでみようとしますね。これは副次的ですが大きな効果です。

青木 新井先生いかがですか。

新井 私は「戦争と大学」というテーマだったのですが、自分が勉強しながら、調べながら書きました。蓄積があまりあったわけではないのですが、いかにこの大学が戦争に協力したかについて、かなり重点的な話になってしまいました。執筆にあたってどこまで書いてよいかとか、何を書いてはいけないとか、大学のイメージが悪くなるようなことを書いてはいけないなどということを考えないで書けたということが率直な感想でした。なぜなら、戦争とはすべての知性を抑圧してまで断行するもので、その点を隠蔽してはいけないと思ったからです。その意味では、読まれた方で不満のある人がいることでしょうし、ああそうだったのかと納得された方もおられたことでしょう。

でも専修大学だけが特別に戦争協力したというわけではなくて、ほぼどの大学も似たようなものだったということ、事実としてはそういうことなんだと、専修大学を例に描けたと思っています。しかし戦争に批判的な教員もいましたし、そうした教員たちの授業内容も紹介するなど、それなりに戦時期の専修大学の歴史としては客観的な位置づけができたのかなと思っています。

青木 新井先生は戦中に大学生活を送った方々にインタビューをした内容をかなり使われていますが、その辺はどうですか。

新井 折角ですからね。当時のOBの人たちが、だんだんと戦争色が深まるなかで、どんな思いで事態を迎えたのか、どんな思いで戦場に向かったのかといったお話を直接うかがって、非常に感動的な話も聞きました。それで、そういう話もなかに取り込みました。あの意味ではリアリティが出たのかなと思います。

それはやっぱり授業でも、その話をするとき学生の関心が強くて「ああ、そうだったのか」とかね、「自分だったらどうしていただろうか」とか、自分に置き換えての感想が出てきましたので、それなりに学生にはメッセージが伝えられたのかなと思っています。

青木 では永江先生いかがですか。

永江 私が最初に大学史にかかわらせていただいたのが、創立者の田尻稲次郎先生の足跡を調べることでした。こちらの『専修大学の歴史』のほうでは、明治期の経済科・理財科を勉強させていただきました。

私立学校として生まれた専修大学が、大学昇格をめざして動いていく時期なんですけれども、なかなか困難が多いと。特に行政官や法曹への登用が難しくなる関係で、法律科が危機に陥ってしまっ

そうしたなかで経済科が理財科と名称を変えて中心となっていくのですが、何分にも専修大学はもとが夜学といえますか、専任の教員が少ない状態でスタートしていますから、どうしても教員がすべてを授業に注ぎ込む体制ができていない。そのところが苦しかったのではないかと一つありますね。

そうしたなかで書いていて印象に残りましたのが、徴兵令特例の影響の強さといえますか、日清戦争のあとにたぶん専修学校だけではなく、私学の学生が増えていく背景に、やはりあまりの戦死者の数の多さがあったと思います。そういったものを背景にして、大学や専門学校が徴兵令特例を設けていく。私も勉強してわかったことなのですが、徴兵猶予と言いながらも猶予ではないのです。二六、七歳まで猶予されるということは、当時としては事実上、免除になっていたということだろうと理解しています。そうしたなかで、大事な子どもを戦争にやりたくないという父母の心情と、軍隊や戦争のあり方と専修学校の衰退や発展が深く関係していたということが勉強してわかった新たな発見でした。

あともう一つだけ言うと、あとの先生が書かれたところでですけど大学昇格運動ですね。経営者の立場の教員たちが、おそらく大学昇格に当初あまり積極的ではなかったところを、学生が運動を起こして、大学昇格を求めていく。こうした流れはその後学生が主体となって大学を盛り上げていくという流れをつくった意味では面白い話だと思いますね。

青木 その点で大学昇格運動とか大正期から昭和にかけて執筆した瀬戸口さんから一言お願いします。

瀬戸口 今、永江先生の方からお話があったのですが、ある意味私がかかせてもらった大正期というのは、私立大学の歴史を振り返るなかで一番の変革期であったと思うのです。そういったなかで、高等教育を受けている学生たちが、色々な運動にかかわっていく。そして私立大学のあり方が変わっていく。そういう意味では非常に面白い時期を描かせていただいたなと思います。

やはり、学生たちが運動を起こしていくことで、その後の大学の変化に繋がっていくという部分も当然あります。学校経営や学校と学生の関係性など色々なことが大正期に変わっていったと考えています。今回授業でも大正期の専修大学の歴史を話しましたが、やはり「学生運動」と言うと、どうしても一九六〇年代、七〇年代というイメージを学生も持っていました。しかし大正期にもあったということ、学生が学校運営に積極的に関与しようとしていたということと、講義を通して学生も初めて知ったようです。授業を聞いている学生にも、大正期の時代性というものを少しはわかってもらえたのではないかと思っています。

青木 なるほど。どうもありがとうございました。

先生方にはこういう視点で執筆していただいたのですが、川村先

生にはできあがった原稿を一度、読んでいただきましたがご感想をお聴かせください。

川村 あまり読み切れていないのですが一言申し上げます。ある意味『蒼翼の獅子たち』（志茂田景樹著 河出書房新社 二〇〇八）が、大学の創立に至る経緯について親しみやすいかたちで書かれました。恋愛もあったりして面白いけど、そうではなくて、きちんとした資料に基づいて、またこれまでいろんなかたちで近代史研究に携わった方々が、大学の歴史を客観的に見つめながら、しかもわかりやすく書いているという点では大変良かったのではないかなと思います。

それと同時に、これをきっかけに資料をきっちり集めていこうじゃないかとか、じゃあそれを基にしているんなかたちで公開する、展示してもらおう。そういう努力の出発点として、こういった書物が編集され、そして講座を設けて授業でも使われていく。これは今まで一三〇年の歴史がありながら、大学の歴史が何であるかということについて、学生に触れさせる機会をもたな過ぎたという点では、遅きに失する点ではあるのだけれども、史実を通して大学の歴史を明らかにしていくという点では良かったと思います。

あと、やはり僕は商学部ですから、当時、東京高等商業学校（現・一橋大学）の教授だった鹿野清次郎さんが提唱した計理学を導入した「計理の専修」という原点の確認をいつもさせてもらいながら、

いろんなところで話をするときの頭にもってきます。そういう意味で確認できるという点も良かったなと思いますね。

錚々たる計理学会の、当時の若手、新進気鋭の人たちが専修に集まり、それを研究のベースにして、いろんな論争が行われましたが、それを専修大学を拠点にやられた。そういう原点を専修大学は持っていた。それと計理士法。この法律が今日の公認会計士制度に繋がってくるのですが、その計理士法を制定するときに国会で大変な論議がなされます。そのときも学生たち、卒業生たちが一つの運動の核になっています。当時、専修大学の教員や学生たちが持っていたそのエネルギーは一体なんなんだろうか、そんなことを思いながら、読ませていただきました。

青木 ありがとうございます。菅原先生、読んでいただいたと思いますがいかがですか。

菅原 執筆にも何にもかかわらずにいたので、だいぶ外から読んだかたちになっていますけど、新井先生自身がおっしゃった点が、非常に画期的だと思います。大学史というのはどうしても大学のPRみたいなものが入ってしまいますので、関係のない人が読めば、しよせん広告だろうという感じになると思うんです。

ですが新井先生が書かれているのは専修大学の負の部分。本当だったら蓋をしておきたい部分が書かれているところが印象深かったで

す。専修大学の歴史や歴史そのものあまり興味がない人たちが法学部の先生と話をしても、こういうマイナス面にあえて光を当てるといのは一つの見識だということだ話題になったことがありました。自分でも実際に読んでここは驚いたというか感銘を受けた部分でしたね。

もう一つの発見は、専修大学は法律専門学校として始まった、法学部こそが本家なんだというような思いを持っていたのですが、どうやらそうではないということですね。法学部としては、少なくとも一度は失敗しているのです、実際には経済、当時の言葉でいえば理財を中心とした大学だったので、そういうのは良くも悪くも単なる事実の面ですけど、この本を読んでみてそれがわかりました。法学部の教員としては、必ずしも面白い話ではないわけですけど。

青木 ありがとうございます。今まで私立大学が刊行した自校史は、自分のところの懐古趣味みたいなかたちで出してきたのが圧倒的です。『百年史』とかいろいろな刊行物はたくさん出版されますが、大半は大学内部で完結しています。それに対して『専修大学の歴史』は大学自身が編集し、それを今度は市販したことに新しさがありません。これは初めてのことです。どの大学もやったことのないことをやろうということで、平凡社から出すということになりました。その間、朝日新聞社とか小学館とか色々話をし、結局は平凡社に落ち着くことになったのです。専修大学松戸高校の運転手さんの感

想は、『専修大学の歴史』を通して日本の近現代史を学んだ気がします、と言っておられました。ちゃんと読まれている人だなあと感動しました。

その点で多くの方々を読む機会を持ってもらえたと私は思っています。とりわけ卒業生の方々にもかなり読まれているようです。話を聞いていますとね。その方々が言っているのは「こんな大学だったのか」という印象が非常に強い。私も自分で執筆していて「えっ」と驚きました。創立者が持っていた個性が結局は、日本の近代なかでやっぱり大きな存在価値を持たせてきたのじゃないのかというのが私の第一印象です。

それからもう一つは、大学というのはこれほど政府、国家に振り回されてあっち行ったり、こっち行ったり。そういう政策に振り回されていくなかで私学の持つ理念を自己主張していく。これは現代に入ってもそうですね。それともう一つは経済。日本経済の動きと不可分に結びついて、それをよく描いていると思います。人材を養成するというのはこういうことなのかと。両方のせめぎ合いのなかで、ここまで来ているという感じを非常に強く持ちました。

そういう点で先生方に書いていただいた原稿は、そのなかで専修大学は私立学校としてどのように存在してきたのかということがわかるように描いていたと思います。ですから新井先生の書かれたところは、あれは戦争中の記録が幸い史料が残っていて、初めて世に出たものです。明治までのものは関東大震災でほとんどやられてし

まった。専修大学は幸運にもアジア・太平洋戦争のときの東京空襲ではやらなかった。だからあの資料が残ってたんですね。しかし『専修大学百年史』の時は使われなかった。おそらく菅原先生が言われたように、負の遺産と思われたからでしょう。そういう点で今回は、新しいものが出て事実が明らかになったと思います。

もう一つはこういうことができたというのは、現在の理事長・学長の情熱にあると思います。ふつう雇われ学長とか理事長とかは何もありません。その点で専修大学の理事長・学長は、すぐく大学の歴史を重視し、それを新しい大学像を示す出発点にしようとする意欲をお持ちです。大学史の講義を担当していただいであれだけ鮮明な大学像を論じられる学長はそれほどいません。当然、資料保存と公開に積極的です。トップの見識とリーダーシップが重要なのです。

『専修大学史(紀要)』の創刊号を関係機関へ送ったのですが、そうしたら「お前のところの学長なんだこれは？」と、ここまで明確な大学像を持っているのかって。賞賛されたり、あきれられたり(笑)。そういうところから、この本ができたということがあります。

### 駒井重格展の開催について

青木 『専修大学の歴史』を編纂する過程で、初めて出てきたのは創立者の問題です。大学のアイデンティティを考えるうえで、彼らの役割は大きいからです。そこで「創立者展をやろう」と。できればそれを創立者の生まれ故郷でやろうという話は前から出ていたの

ですが、桑名市に調査へ行った時にこの話になって、桑名市博物館の方に「共催してもいいですよ」と言われ、こうなったのです。そこで駒井重格という若くして亡くなられたこともあって一番取っつきにくい人物から入ってしまったのです。大変だったのですが、思わぬ協力がありました。

一番驚いたのは地域の校友会(卒業生の会)の方々がものすごく積極的に協力してくれたという点です。そういう意味で創立者展のような展示会は大学のなかだけではなく、地元、地域、地方でやる方が、大学にとってもものすごく大きい力になるのではないかと思えます。大変なご苦勞をなされた瀬戸口さんどうですか。

瀬戸口 今、青木先生から、三重県・愛知県の校友会の方々も積極的ににかかわっていただいたことに関してお話がありました。その点では非常に意味のあった展示だと思っています。やはりこういう機会がないと、卒業生たちもなかなか集まらないという校友会自身の事情も当然あると思いますので、いろんなかたちで大学の方から積極的に働きかけることによって、地域における大学のイメージアップに繋がられるのではないかと考えました。

青木 それともう一つはですね、一人の人間を取り上げますので見方によって集める史料が非常に変わってくる。今まで考えもしなかったところに存在するのです。創立者の一人である駒井は桑名藩士で



すから、戊辰戦争に従軍し、出羽の庄内まで逃げていくわけですね。今の山形県鶴岡市大山まで逃げていき、そこで負傷の治療にあたるわけです。その大山に関係史料があるのではないかと思います。多分、『専修大学百年史』の時にはほとんど考えもしなかったと思います。そして行ってみたら実際に存在するわけですね。そうしたことで新しい人物像が浮かび上がる。ですから、新史料を収集し、資料集を刊行することは大学のイメージを大きく変えられるのではないかなと感じました。

瀬戸口 今回、こういうふう一人の人物の生涯を取り上げることによって、これまでその人が大学にかかわっている時期だけ見ればいいという捉え方をしていた部分がありました。大学史を近代史のなかにあてはめて考えていけば、大学にかかわっているところ以外の点にも光を当てて、その人となりを見ていくという姿勢がある程度作れるようになったということです。これも今回展示をしたことの大きな成果ではないかと思っています。

青木 永江先生にはシンポジウムを含めて色々ご迷惑をおかけしましたが、どうですか。

永江 創立者四人のなかでも駒井重格先生というのは、一番イメージの掴みづらい人です。おそらく田尻稲次郎との親交が一番深かった

であろうということで、田尻先生の史料から辿り始めたんですけども。お話をさせたいただくうえで大変幸運だったのは、若槻礼次郎の自伝に『古風庵回顧録』という史料があるのですが、そこに駒井先生が登場されていることに気がついたことです。

私は経済史なものですから、若槻礼次郎という昭和金融恐慌ですとか、ロンドン海軍軍縮条約との関係で彼の自伝は見えてはいましたが、彼の大蔵官僚時代は読み飛ばしていたのです。そうしたら駒井先生が大蔵参事官だったということで、自伝を開いてみたら駒井先生が頻りに登場する。若槻礼次郎はあの時期、病弱だったというので、駒井先生が「弓道場に来い」と。それで一緒に稽古をしたことで、若槻礼次郎の体調も回復したのだという話がある。そうしたことから駒井先生のこと議論を深めるきっかけができたというのは、私にとって幸運だったと思います。

青木 新井先生、展示そのものについて話してください。

新井 展示は専修大学だけでやっていたら、あそこまでいかなかったと思います。これはやっぱり桑名市博物館と、それにプラス一橋大学が入ってききましたから。この三つが共催したことで相乗効果があったなと思います。それぞれがそれぞれのところで、それなりにプラスアルファがあり、その過程でまた新しい発見があったりしました。その意味では、それぞれが独立で駒井重格展をやった場合を

想定しても、ずいぶん大きな成果があったなということが今回の第一印象です。

ただやはり、展示はそれなりに良い展示になったのですが、それを本学の学生が見る機会がない。つまり、それをそのまま大学のどこかで展示する場がなくて。結局、うちの学生で見たのは若干はいるかもしれないけど、本来のうちの学生が「ちゃんと見たよ」って言う機会がなかった。そういう施設がなかったということですね。そのことをまた、より痛感しましたね。大学のなかにそういう施設がない。巡回展でやって最後はうちの大学のどこかでやろうって、普通はなるんだけど。それをできる場はないということを改めて痛感した機会になったなあと思います。

青木　そうですね。新井先生はシンポジウムのあとの懇親会で、学長に向かって「大学がやはり博物館を持たなきゃ駄目なんだ」って切望されましたが、たしかに今回そういうものを持っていないと、もう一回大学でやるというのは不可能だということを実感しました。

大谷先生、展示をご覧になられていかがですか。

大谷　大変面白かったです。展示というものは私は素人なんですけれども、やっぱり地元でやったということの意味が大変大きいと思います。もちろん興味ある人がたくさん見るといこともあるので

すが、「ああ、こういうところで生まれて、それからこう旅立っていった」といった身近な感覚で見ることができた。地域と繋がる展示というのは大変面白いと思いますね。

それから、これは大学史とは直接関係がないんですけど、桑名藩というものの幕末、それから明治における位置ですね。たまたま博物館からお城の本丸の方まで見に行って回ったんですが、そこでもいろんな追悼の施設や慰霊の施設がありました。いわゆる靖国神社、護国神社というような系統とはまた別のタイプでしたが、やはり地域によって個性があるのだと、非常に面白いと思いました。

そのなかでも何かあると一番最初に寄付している人はお殿様なのですが、そのあとには駒井の名前が。駒井は藩から離れて日本の国家のなかに組み込まれるのだけれども、もう一つの心は自分たちは潰された側の人間として、そちらの方にも何か残したい。本当は官僚として自分たちを潰した側にいるのだけれども、一方では地域や藩への愛着を持っていたんだなと思いました。

青木　そして同窓生の役割って非常に大きいですね。一橋大学の同窓生の方々も来てくれました。来年度は鹿児島で田尻稲次郎展をやりたいと思ってますが、駒井重格と田尻稲次郎という経済学者が、何で繋がっているのかを考えてみますと、ただ何となく繋がっていたわけではないですね。桑名藩と薩摩藩というのは江戸時代中期から非常に親密な関係だったのです。宝暦治水事件で木曾三川の改

修を命じられたのは薩摩藩で、桑名に膨大な人間を派遣して、藩経済が落ち込むほどの作業を幕府から命じられます。あの時に薩摩藩に手を貸したのは桑名藩なのです。今でもあの時に亡くなった人たちのお墓が桑名にあり、鹿兒島からご子孫が供養に参ります。ですから薩摩藩は桑名藩に恩義を感じているのです。だからそういう関係もあって、あの二人が結びついた可能性が十分あります。

**川村** 明治維新にあたっては国は二つに分かれるでしょ。彦根はあの意味であとから官軍になっていくわけですけど。禁門の変では会津と薩摩が繋がって、当然会津と桑名は繋がっている。あるところまでは同盟的な関係でやっていくのが、あるところで反転していき、そして戊辰戦争に繋がっていく。ある時まで同じでありながら、あるところで敵対していくというものがね、個人的な関係でどうやって乗り越えられていくのかな、って今話を聞きながら個人としては大変興味があります。

**青木** それで今度は田尻展をやるわけです。これもまた鹿兒島県とやることになるわけです。

**川村** 後援ですか？

**青木** 共催を考えています。ですからこれも新しい経験を大学はし

ますので、今後またものすごく忙しくなります。

田尻については菅原先生もご存じだと思いますが。学者じゃなくて、当時の大蔵省を動かした張本人ですから面白くなります。あと二人、相馬永胤は彦根で、目賀田種太郎は東京でやりたいですね。何年後だかはわかりませんが。

**高木** ちょっと話が前に戻りますが、桑名でやったシンポジウムの時にあれだけ卒業生が来ていながら、あの卒業生たちが何かの機会をやって、そこへ学長が出て行って挨拶して「みなさん、ありがとうございます」とうございました」っていうことができなかったのかと。大学として残念じゃないですかね。

せっかく卒業生が集まったのだから、別にわずかなお金を彼らが拠出したって大学から持ち出さなくても、「どうですか？」ってセッティングを上手にやれば。皆さん集まって、学長もせっかく来て泊ってるんだから、そこで一言「皆さんのご援助で盛会裏に終わることができました。ありがとうございます」って挨拶していく機会にしないというのはもったいなかったなと感じますね。

**新井** 一橋大学は卒業生たちが集まってやりましたよね。

**青木** そこまで気が回らなかった私の不徳の致すところです。そういうことは大事なことです。卒業生の皆さんの心を汲み取ることは、

これからの大学のイメージアップや学生の就職活動にも絡む大切な問題ですから十分考えていきたいと思えます。

**川村** そういった意味ではね、やっぱり校友会ですよ。二五万もの校友が大学に対して無関心である訳ではなく、普段から大学側からの働きかけが必要だということを今回教えてくれたのではないですか。

**新井** できれば準備段階からね、地域の校友会とかなんかともかわりを持つということが大事じゃないかな。

**青木** 校友会の総会には行って、こういうことをやりますからよろしくというお願いはしております。育友会（父母の会）にも名古屋に行つてやりました、けどそれだけじゃ駄目なのです。そしてもう一つはこれから日常的にも繋がっていくことが大事ですね。

**田尻展**の開催は来年の一月ですので、来年八月の育友会には行こうと思つています。

### 大学所蔵の資料整理と公開の体制を

**青木** そのほかいろんな企画が昨年度はありました。創立者同時代展ですとか。そういったことをほとんど大学史資料課が力になってきました。そういうことをやれるところまでできた。材料も少しづつ

集まってきました。けどそれを常時公開する場がない。常設展ができる場所ありません。ですから、常に大学史が重要であるということを訴えていく場が必要ですね。

しかし一番の問題はどこに資料があるかわからないという点です。一応は整理されているのですが、書庫のなかに入っていただければわかると思いますが、図書以外は全部、整理されているように見えますが目録も何にもないのです。一括されて、そのなかには膨大な資料が入っているんです。これをどうするか、という問題を今抱えているのです。大学側は「いつやってもいいですよ、整理してください」と言っているのですが、中性紙の封筒など用意はしているのですが進まない。大谷先生、新井先生、何か知恵はないでしょうか。

**新井** それはむしろ歴史学科の学生にとっても体験する場所でもあるし、文書というものはどういう物で、どうやって整理したらいいのかということも実習として取り組める要素もあると思うのです。そういうふうによく組み込んでいけば、歴代にわたって文学部歴史学科、大学院生も含めてですが、そういうものを使う手もなくはないですよ。それで歴史調査の教育の一環として使えるのではないかなと思います。

誰か専門家に頼んでやるという手もなくはないけど、せっかく大学にも歴史学科があるんだから、それを利用できる機会が作れば、それこそ両者にとってプラスになると思います。

青木 そうなって欲しいものですね。もう一つは仕事が進んでいき、いろんな場所でアピールして行って卒業生の皆さんから資料をいただきたい。関係資料は少しづつ集まってきていますが、そもそも明治期の卒業生は少ないですから、そういう人たちの資料、ノートとか写真とか非常に大事になってきますので、今その辺のところもやり始めているのです。この間どんな資料が出てきましたか。

瀬戸口 明治期だけでなく江戸時代の古文書まで出てきました。おそらく相馬関係だと思うのですが、彦根藩関係の古文書も出てきますし、開けてびっくり状態のものがいまだにあると思います。新井先生がおっしゃったようにある程度、恒常的に整理していく体制が当然必要になってくると思います。それが一番良いパターンです。古文書学であったり博物館学に組み込んで大学史資料課が持つ資料を整理していただけるのなら、大学が所蔵する資料が学生の研究にも還元されるという部分でも意味があると思います。

新井 博物館実習というのがあって、学芸員の資格を取得する学生は必ず受けなければいけないのです。現在はあちこち頼んで実習させてもらってるわけです。本学でできれば一番良いですよ。古文書学や博物館学の実践としてはね。

瀬戸口 ちょっとしたインターンみたいなかたちでも結構ですし。

菅原 でも、学生を入れるにしても引率する人も必要になるわけですよ。それを我々がボランティアにやるっていう体制でいいのか。結局、我々は今日もプラスアルファの仕事をしたうえで出席している。この体制でずっとやっていくのですか。皆さん本当は余剰の能力がないなかで、ひねり出してやってらっしゃるわけです。私はそれもできなくて、あまりかかわれませんでした。このままやっていくのか、専従の人が必要なのか、あるいはそのためにお金が必要なのか、ということも考えていかないと。恒常的にこの体制を続けられないんじゃないですかね。

青木 非常に難しい問題です。アドバイザーの段階から、ようやく大学院で専門的な研究や他大学で研究してきた専任職員が配置されるようになり、体制を整えている段階なので、今少し時間がかかることと思います。また学生の古文書学の実習や、博物館学実習に組み入れてはという意見はある意味で説得力があります。ただ原資料を整理してみたいという院生がどれほどいるのか心配です。これから大谷先生のところに育つかもしれませんがね。逆に法学部の大学院生はどうですか。先生方のゼミの一環として。

菅原 それはもうまったく無理ですよ（笑）。

青木 経済史だって無理でしょ。本当に歴史学の学生で育成するし

かないのですよ。

永江 そうですね。なかなか人がいませんね。

青木 でもこれからは卒業生たちの資料提供が増える一方ですから、なんとかやらなきゃいけない。まだ専修大学は少ないほうなんです。早稲田や明治や慶応は卒業生のほうから「預かってください」と送ってくる。専修もそんな時代がまもなく来ますね。

瀬戸口 早稲田や明治などは整理に従事する人数も違いますからね  
(笑)。

青木 しかし何とか整理を始めます。色々な人たちに協力していただくかたちで。

### 一五〇年に向けての資料集刊行

青木 次にやらなきゃいけないのは、皆さんの合意のうえで学長にも提案してありますが、次の一五〇年に向けて資料集を一〇冊作ることです。つまり資料をできるだけ多くの人に利用していただく。大学が所蔵しているものだから、大学で秘蔵していればいいというて保管しておくだけではなくて、日本の近代史の研究に役立てる。そういう仕事をしようということまでは決まっています、全一〇巻の

内容は承認されています。しかしこれは大変な作業で、大学に残っている方々に引き継いでもらいながら実現したい。そんな体制づくりが緊急に必要となります。

特に「戦争と大学」というような重要な資料集を絶対出したい。もう一つは創立者に関しての資料集も出したいですね。あと一番大きなものは五大法律学校。その関係のものを本学だけではなくて、他大学も含めて資料収集して出す。当時、専修大学が果たした役割は非常に大きいですから、そのところをアピールする。そういう仕事これから出てくる。これは資料の収集と合わせて行う。それから資料集には解説、研究が必要なんです。それをこれからやっていかなきゃならないですよ。皆さんにご協力を願わなければならぬのです。

瀬戸口 資料集に合わせてその巻に合わせたリブレットみたいなものを刊行していくことも考えています。

新井 そういう意味でいえば、今はこれだけのメンバーですが、もう少し協力者と言いますか、まだ学内にいそうな気がしますけど。

瀬戸口 全巻手伝ってもらうのは難しいと思うので、ひとまず一巻ごとに手伝ってもらう方を探すのもいいと思います。

大谷 最初の発言の時に言わなかったのですが、授業をやってみて、そして『専修大学の歴史』の戦後の大学再建のところの執筆を担当して考えたことがあります。昨年が一九三〇年で、その半分が六五年になります。明治三三年（一八八〇）の創立から敗戦までが六五年、敗戦から現在までが六五年。戦後の部分だけで、すでに歴史の半分です。

『専修大学の歴史』の新井先生が分担された戦時期の大学のところは、戦争体験者のインタビューがあり大変興味深く読みました。現在ご健在の方々から何か聞けるというのは、あの時代が一番古いと思います。それから『専修大学史紀要 第2号』では、戦争中に入学した人や戦後すぐに入学・卒業した人の座談会をやってみたのですが、非常に面白かったと思います。不幸なことに、それを組織してくださった古家さんがその直後に亡くなられました。このように急速に戦中・戦後の体験談を語れる人が減っているんです。

ですからその聞き取りを、今急がなければなりません。文書資料はある程度残るかもしれないけど、同時に人々の体験談を残す必要があります。その意味で、資料集の一冊に「戦争と大学」を考えているのは大変良い企画だと思います。

大学の歴史を描き、語るときに、伝統の良いところと悪いところ、伝統の功罪を明らかにせざるを得ません。耳が痛い話かもしれませんが、敢えて問題点だけを指摘しますと、創立者たちは明治一三年に大学を創り、だいたい一九二〇年代には亡くなります。同時期に

大学令による大学への移行も実現します。この四〇年の間に、専修大学と専修大学の翌年に創られた明治大学では、差がついてしまう。なぜそうなのかを問う必要があります。同じような教育システムで出発しながら、片方は成功し、拡大したにもかかわらず、専修大学はそれほど成功しなかったのはなぜか。「歴史は鑑」という古い言い方もありますので、自己批判も必要です。

それから、一九二〇年代以降、創設者のあとを継いで専修大学を担った阪谷芳郎初代総長の問題です。いま専修大学図書館では阪谷の関係文書を翻刻・編集していますが、大変大きな役割を果たしたにもかかわらず、今までの大学史では十分に触れられてこなかった阪谷について、今後色々な角度から検討する必要があります。阪谷総長は、最後に戦争の時代に大学を担った世代の人たちを引き上げて、彼らに大学経営を任せました。阪谷の死後に彼らが軍国主義的な学

校経営を行ったことをどう考えるのか、という問題もあります。

批判的なことばかりを述べましたが、戦後の専修大学再建の部分を書いた印象は、専修大学とその卒業生と学生はたいした底力を持っているなというものでした。大学存亡の危機に際して、今村力三郎という古い卒業生を中心にして、卒業生や学生はかなり強引なことをやって、戦時中の体制を担った教師たちを追放する。次に、東大から若手の教師を招いて、責任者の経済学部長と法学部長にすえて、あえて言えば「ミニ東大」のようなものを作るのです。今村に強く請われて、大河内一男や杉村章三郎が経済学部長と法学部長になり、

新たな教員組織を作って再出発した。その後大河内は学長にもなります。そういう人がよく応じたものだなとびっくりします。

大河内らを継いで大学を担った鈴木義勇という人の役割も大きかったと思います。鈴木は戦前に東北大学教授を追放されたあと、恩師の吉野作造に今村を紹介してもらって以来、今村を自分の弁護士としての師匠だと思っている。だから、社会党の国会議員や閣僚であるとともに、自分の母校である東北学院の経営にあたっている多忙な身でありながら、専修大学の学長や一時は理事長までやっています。名前だけかと思っただけで資料を見ると、週に何回かはちゃんと大学に来ている。そういう人たちが、今村のオーラのようなものに引き寄せられた人たちがいて、そして戦後の専修大学が生まれ変わっていく過程というのが大変面白いと思いました。

そういうことを語る人は本当にもう限られていて、今を逃すと駄目だろう、貴重なオーラル資料が集まらないだろうという感じがします。

青木 そうですね。先生がおっしゃったように、戦前の人たちは特攻隊の方々が八六、七歳ですか。だから早くやらなければいけない。

新井 一番若い世代の人たちがその年齢になってますよ。それを今、どの大学もやっています。最近、中央大学で戦争体験者を学生が訪ねていく、そういう活動をしているという報道がありました。私

は今、非常勤で中大に行っているのですが、学内新聞にまで記事が出てるんですよ。

瀬戸口 二、三年前から明治大学もやっていますし、京都大学も結構やっていますね。

新井 そういのができるのは本当に今ギリギリのところに来ていますよ。

青木 そうですね。これは大変ですね。でもやらなければいけませんね。

高木 大谷先生の言った「ミニ東大」みたいって話だけど、創立当時がそうですからね。その時期はほとんど東大の法学士なりがここに来ますからね、法律科の場合は特に。

大谷先生が前に言ったことがあるけど、明治大学との違いは数ですよ、あきらかに。だって高橋文之助(明治一九年卒)が認定試験(特別監督学校の優等生試験)の際、凄いい点数でトップを取ってるし、五番以内に専修がもう一人いるんですよ。だけど中央大学はやたら落とされて、おかしいんじゃないかって異議を唱えるので、二年であの試験はなくなるのですが。他の大学は何しろ、代言人として数をどんどん出しますからね。やっぱり一定の数が必要なの



ですね。

青木 だって毎年一三人とか一五、六人しか卒業させないんだから  
(笑)。

高木 だからそのところがやっぱり。あとは給料無給でみんな頑張ったっていうその辺も。専任教員がいなかったっていう最初の出だしが、そのまま尾を引きずっているって気がしますね。

青木 緊急にやらなければならないことは、大谷先生がおっしゃったような問題があると思うのです。いつ刊行するかってことは別にして、それは進めていかなければいけませんね。

そして高木先生が在任中に、五大法律学校関係資料からやろうかなとは考えています。これは法政・明治・早稲田・中央大学そして東京大学法学部の調査をしなければいけません。一度、明治大学は五大法律学校(『新聞集成明治期五大法律学校関係史料集』)という史料集を出しているのですよ。簡単なものですが、残念ながらそれはほとんど基本資料だけですから、本格的なものを作る必要があります。その辺のところから一つずつやっていって、あわせてやらなければいけない調査として、特にインタビューによる記録を残していかなきゃいけませんね。

戦後のところの史料は非常に少ないので、具体的なところを考え

れば、研究や教育に携れた方々に。もう一つは学生のインタビューが必要だと思います。そういう課題がいっぱいあります。

#### 大学史編纂体制の充実を

青木 最後になりますが何か言いたいことがあるでしょうか。菅原先生どうでしょうか。

菅原 さっき言ったことの繰り返しになるんですけど、大学史に関する編纂事業を続けていくためにはもうちょっと体制を充実させていかないといけないと思います。昨今学内の仕事がどんどん増え続けている状況で、さらに自分の研究ということもあるし、頼まれ仕事もある。そうなるらと一体どこで時間が取れるかなというのが。皆さん同じだと思うので。そういう予算措置と専従スタッフみたいなのが新たにできないと、やれることも限られてくるんじゃないかなという気がします。

青木 その点は先にお話した通りです。私が三年前に来た時は女性が一人いただけでした。そこによく瀬戸口さんに来ていただいて今年の四月から専任教員に昇格させていただいたのです。確かに嘱託職員の石綿豊大さんと二人だけではこれからの仕事は大変難しいと思います。色々な働き方がありますので、その点の人的充実を含めながら努力していかなければなりません。しかしそれにはな

んと言っても実績を積み上げないといけないのです。

**新井** 思いつきの提案なんですけど、生田の校舎のなかにちょっとでもいいから大学史が展示する常設の場を、どこか確保できないかなと思います。例えばこの九号館の一階のエレベーター前に、土器がずっと並んでいますね。あれは私が来て一〇年以上になりますけど一回も代わっておりません。たまに違うものが入れ替わっていることがあっても、同じような土器が入ってるだけです。

何であの土器があそこにあるのか意味がよくわかりません。あそこでもなくともいいと思うのです、とりあえずはどこかに一つ確保できて、少しでも大学史の一番基本のところを飾る場所があるといいですね。

**青木** なるほど。私も同じことを考えていましたので、一度交渉してみます。

**川村** 東洋大学に行くからね、ちゃんとした建物の一角にあるし。大東文化大学にもあるんですよ。そういうふうには各大学とも、入ったところにすぐね。もうおっしゃる通りです。

**大谷** 話は尽きていると思いますが、やはり体制とスタッフですね。この間、大変精力的に本の編纂とか、雑誌の編纂とか、色々な展示

会とかやられてますが、やはり時々見に行ってみると現在のスタッフはそれにかかりきりで、基本的な資料整理のことに費やす時間が限られている。しばらくはこの状態が続くんじゃないかと思imasので、もう少し知恵を出して充実させた方がいいと思います。

**青木** わかりました。永江先生いかがですか。

**永江** では違う話で言いますと、教養特殊講義ですね。あれも持ち回りで先生方に御苦労をかけて、何よりも瀬戸口さんがすべて取りまとめてくださって、授業までやられています。学生の反応は悪くないと思うんですね。学長がまず自ら話して下さることもモチベーションになっていきますし。

学生も最初から大学の歴史を知りたいと思っているわけではないと思うんです。でも話を聞くと「あっそうなのか」というふうな思っで、「意外と面白かった」と言っわけですね。抽選の倍率もそこそこ高くて、希望者すべて履修できるわけではない状況なんです。需要という言い方はともかくとして、学生が自分たちの大学のルーツに対して、実は知りたい気持ちを抱えている。ということですので、大変は大変なんですけど、こういう取り組みに意味があるんだなど、ここ最近思っています。

**青木** 川村先生いかがでしょう。

川村 この前のサテライトキャンパスの展示は面白かったですよね。高度成長期の専修大学。ああいう企画も面白いなと思うと同時に、そのあと年表も作成して展示したでしょ。なんでもうちよっと字を大きくして、わかりやすくしてもらえないかと。ところが色々制約があるみたいですね。そういうところとかね、もったいないなっという感じは持ちました。

青木 今の永江先生の関係で言いますと、あれ一年生だけじゃないのです。受講しているのは二年生、三年生、四年生も結構いるのです。四年生のなかにはね、もっと早く知りたかったという意見がありました。就職活動をするときに「あなたの大学はどんな大学ですか」って聞かれる可能性がいっぱいあるのですが、そのときに自信をもって説明できるような、そういう状況を作ったほうがはるかに有利だと思いますね。

話は尽きませんが、最後に本日の座談会の全体をまとめさせていただきます。

座談会を終えて――まとめにかえて――

青木 本日は色々と建設的なご意見をいただきました、どうもありがとうございました。ともかく一三〇年記念事業のなかで重要な『専修大学の歴史』の刊行が無事に行われ、期限に間に合いました。そして内容も充実したのになって、読んでいただいた皆さんには

概ね好評でした。これもアドバイザーの先生方のおかげです。

また『専修大学の歴史』をテキストにした教養特殊講義「日本近現代史のなかの専修大学」も多くの受講生にその内容が理解されて、専修大学に入学して学習意欲が高まるきっかけになっていることも、執筆と授業を担当していただいた皆さんの協力なしにはできなかつたことです。

そして昨年二月中旬から今年の一月初旬にかけて行いました桑名市博物館と一橋大学との共催による駒井重格展は、大学として初めての経験でしたので大変でしたが、なんとか乗り切りました。シンポジウムも盛況でした。その際、卒業生（校友）の援助と協力の大きさをしみじみ感じた次第です。歴史というものはすごいものです。大学としてそういう卒業生とどう連携していくべきかという経験を、次の鹿児島県との共催による田尻稲次郎展では、ぜひ活かしていきたいと思います。

こうした様々な経験のなかで、一番感じたことは大学が所蔵している資料をきちっと把握していないことです。その点で大学史資料課の最も重要な資料の整理と公開という作業が一番遅れていることを痛感しているところです。この点については、色々なご意見をいただきました。その貴重なご意見を活かして恒常的な整理体制を一日も早く作りたいものです。またその際に、もう一つ大事な仕事として資料収集の作業がありますが、戦前・戦後という大変動期に学生生活を送った卒業生が、まもなく八〇代後半から九〇代を迎えま

すので、彼らへのインタビューを通して、生の声を残す作業をできるだけやる必要があります。

そして最後に創立一五〇年に向けての準備を本格的にしなければなりません。もうあと一八年になってしまいました。やっつけ仕事で慌てて記念誌を作ることはもう止めましょう。そのために資料集を随時刊行していつ、一五〇年史を執筆する際には、史料的にばっちり裏付けられている体制づくりを始めたものです。その点で第一番目に専修大学の学問・教育のベースとなった五大法律学校関係の資料集を、前身が五大法律学校である法政・明治・早稲田・中央大学、そしてそれらを監督した東京大学法学部の協力を得て刊行したいと思います。

専修大学一三〇年史編纂アドバイザー部会から専修大学史編纂事業アドバイザー部会に名称が変わりましたが、課題は山積みです。今後ともよろしくお願いいたします。本日はどうもありがとうございました。

(注記)

当日は所用のため座談会には参加いただくことはできませんでしたが、文学部教授・矢野建一先生も専修大学史編纂事業アドバイザー部会のメンバーに名を連ねられています。

2010年9月14日配布資料 大学史資料課 作成

## 座談会「専修大学創立130年記念事業を振り返って - 専修大学史研究の回顧と展望 -」

出席者：専修大学史編纂事業アドバイザー部会 委員

永江雅和（経済学部教授）、高木侃（法学部教授）、菅原光（法学部准教授）

川村晃正（商学部教授）、新井勝紘（文学部教授）、大谷正（文学部教授）

矢野建一（文学部教授）

司 会：青木美智男（専修大学史編集主幹）

### 1. 創立130年（2009）に大学史資料課が携わった主な事業

- ・書籍『専修大学の歴史』（2009年9月刊行）
- ・企画展「専修大学のあゆみ、多摩区のあゆみ」  
（於：専修大学サテライトキャンパス 2009年3月）
- ・創立130年記念ランチ食事会会場における展示「鹿鳴館の時代」  
（於：専修大学神田キャンパス 2009年9月）
- ・創立130年記念式典会場における展示「専修大学の130年のあゆみ」  
（於：ホテルニューオータニ 2009年10月）
- ・企画展「創立者同時代展」（於：専修大学神田キャンパス、生田キャンパス、サテライトキャンパス、東京芸術劇場 2009年9～11月）
- ・企画展「駒井重格の軌跡～専修大学の創立者、一橋の名校長～」  
（於：桑名市博物館 2009年12月～2010年1月）

### 2. 毎年次継続中の主な事業

- ・定期刊行物『専修大学史紀要』（年1回 年度末発行 2009年度～）
- ・自校史授業「専修大学の歴史」（前後期半期授業）
- ・専修大学校友会誌『Adonis』（季刊）に「大学史資料紹介」を掲載
- ・専修大学育友会誌『育友』（季刊）に「専大豆知識」を掲載
- ・ホームカミングデー展示（毎年11月）

### 3. 今年度の主な事業

- ・歴史学研究会会場における展示「創立者の志と専修大学の歴史」  
（於：専修大学生田キャンパス 2010年5月）
- ・企画展「変わりゆく大学・学生・町なみ - 高度成長期の専修大学と多摩区 -」  
（於：専修大学サテライトキャンパス 2010年9～10月）

### 4. 今後の主な予定

- ・企画展「田尻稲次郎展（仮称）」  
（於：鹿児島県歴史資料センター黎明館 2011年11月～2012年1月）
- ・150年記念資料集の刊行